

一九七三(昭和四十八)年の京都

昭和52年卒 福武 正廣



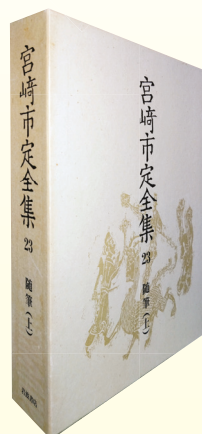
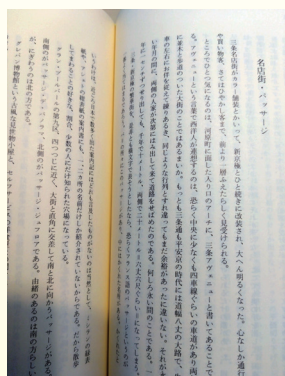
小生は数年前から、自分個人の嗜好に従い、古今東西の書籍を渉猟してきた。自分の感性にあった、また感心した心に残る文章を選び書き留めてきた。実際にはその本から部分を抜き出し、それらをパソコンに打ち込み、文字データとして留めてきた。また自分の会社が印刷会社であることから、それらのデータがある程度まとまったら、二〇〇文ほどまとめて一冊に製本してもらってきた。一回分の文章の長さの目安は、大体A4一ページ。今やその冊子も九冊目となり、十九百余の文章が溜まってきた。

文章と言っても、硬軟取り混ぜて、難しい哲学から最近の面白随筆まで雑多をきわめている。これらで、徒然草や更級日記、ギリシャのプラトンや中国の史記、論語、はたまたトクヴィル、小林秀雄、田中美知太郎、山本七平、山本夏彦、さら



に群ようこ、向田邦子、イソップ物語、「夜と霧」のヴィクトール・フランクフル、トクヴィルなどなどジャンルや時代は千差万別、趣向の赴くまま読み散らし、書き散らしてきた。今回お見せする文章は京大の高名な、文学部名誉教授、宮崎市定先生の京都の街にまつわるお話を紹介したい。

「(京都)三条名店街がカラー舗装とかいって、新京極とひと続きに改装され、大へん明るくなった。心



書名「宮崎市定全集 第23巻 随筆(上)」
岩波書店 1993年
名店街・パッサージュ p384~

なしか通行人や買い物客、さてはひやかし客まで、前より一層ふえたらしく見受けられる。

ところでひとつ気になるのは、河原町に面した入り口のアーチに、三条アヴェニューと書いてあることである。アヴェニューという言葉で西洋人が連想するのは、恐らく中央に少なくとも四車線ぐらいの車道があり両側に並木と歩道のついた大街のことではあるまいか。もっとも三条も平安京の時代には道幅八丈の大路で、牛車の左右にお伴を従えて練りあるき、同じような行列とすれ違ってもまだ余裕があったに違いない。それが永い年月の間に、両側の人家が次第にはみ出して来て道路をせばめたのである。何しろ永い間のことである。一年に一センチずつせり出しても、千年で十メートル、両側で二十メートル、六丈六尺ぐらいに

二条・新京極の繁華街を、是非とも横文字で表そうとしたなら、恐らくフランス語のパッサージュというのが一番よく当てはまるであろう。パリの所々にこのパッサージュがあり、中にはかかれた名所がある。かくれたというわけは、近ごろ日本でも数多く出た案内記にはどれも言及したものが無いのは当然として、ミシランの緑表紙や、アシエットの紺表紙の案内書にも、一、二ヶ所の名前だけしか紹介されていないからである。だから散歩

してまわることの好きな、割合、少数の人だけに知られた穴場になっている。:

どのパッサージュも、京都の三条・新京極ほどには人が混んでいない。それは恐らく道幅が狭くて、カフェーが道にはみ出して商売することのできぬせいであろう。フランス人は大道につき出たカフェー・テラスに陣取って、ひなたぼっこしながら、道ゆく人をながめつ、ながめられつしなないと気がすまぬのである。そしてこの方が自然であり、健康的である。

健康的と言えば、東京や大阪にある地下街ほど不健康で不自然で、その上危険極まりないしろものは外にあるまい。むしろパリ人はこんなものは造らない。日本でもすぐ近く四条地下道がありながら、あえてそれを地下街にしなかったのは、京都人の大出来であったとほめられてよろう。

「『京都新聞』一九七三年四月二十五日「現代のことば」より」

入学当時、愛知県の田舎から出てきた何も知らない小生が、京都という歴史教科書でしか知らなかった地名、建物、を片端から自転車で行き回ったことが思い出される。一乗寺下り松、銀閣寺、御所、三条河原、果ては暗い先斗町の路地などを徘徊した。一九七三年は奇しくも、小生が京大に入学した年だ。